

**ESD・環境教育研究** 別刷

第17巻 第1号 2015年3月

北海道教育大学釧路校ESD推進センター

Reprinted from

***Journal of ESD and Environmental Education***

**Vol.17 No.1 March 2015**

Center for Promoting ESD,

Hokkaido University of Education, Kushiro

## リンゴの語彙とその民族のおよび歴史的背景

境 博成・君島利治

東京農業大学・生物産業学部・食品香粧学科

〒099-2493 北海道網走市八坂196

### The Names of Apple and These Folk and Historical Aspects

Hiroshige SAKAI and Toshiharu KIMIJIMA

Department of Food and Cosmetic Science, Faculty of Bioindustry

Tokyo University of Agriculture

196 Yasaka, Abashiri-shi, Hokkaido, 099-2493 Japan

#### Summary

In Hebrew, the name of apple is *tappûah* and in Arabic, *tuffâh*. These names are assumed to originate from a cuneiform *tph*, apple in Mesopotamia. Persian name *sev* (*siv*) spread to other regions with the Empire extension, like as Kurdish *sêv*, Pakistani *sêb* (*soofu*) and Bangladeshi *sêp*.

Scottish *ubhal*, Welsh *afal* and Cornish *aval* came from Celtic *aval* (*abol*), while Dutch *appel*, German *apfel* and English *apple* were from Old-Germanic *apluz* (*aplaz*). All of these were derived from the old word *abel* in Proto-Indo-European.

Greek *milo* (*melo*) flowed into Rome and produced Roman name *malum*. Its adjective form, *Malus* is a taxonomic name given to the genus of apples.

The Roman Goddess of fertility, Pomona, is also the root of French *pomme*, Catalanian in Spain *poma* and Esperantist *pomo*. Spanish *manzana* came from a *matiana*, an apple species in Old-Rome.

Russian *yabloko*, Belarusian *yablyk* and Polish *yablko* were derived from Old-Slavic *ablûko*, and the same or similar words extended to Russian federal countries, Altaic *yablok*, Buryats *yabloka* and Sakha *yabloko*.

Uigur, an old nomadic people in northern steppe of Tien-Shan Mts., called apple *alma* and this name exists in Kazakhstan, Kyrgyzstan and Azerbaijan. Similar names are distributed in adjacent countries, Turkish *elma*, Uzbek *olma* and Mongolian *alim*.

Japanese *rin-go* and Korean *rim-gum* originate from Old-Chinese *lin-qin* meaning 'birds in forest'.

#### はじめに

リンゴはバナナ、スイカに続いて世界の果物生産量の3位を占めており、先史時代から人類との係りが深い果物である。リンゴの語彙は植物全体と、果実のみを表現する場合とがあるが、本稿では加工や生食用として市場で流通する果実をリンゴと呼称し、それぞれの国や民族のリンゴ呼称について言語文化を背景にして考察したい。

さらに英語のリンゴ呼称 *apple* は文頭では *Apple* と綴られ、ドイツ語の *Apfel* は文中の位置に関係なく常に *Apfel*

である。本稿ではリンゴ呼称は全て小文字で表記し、ギリシャ文字、キリル文字、アラビア文字などは全てローマ文字で表記した。

#### リンゴ属植物の誕生と栽培リンゴ

ユーラシア大陸のほぼ中央部でリンゴ属植物の祖先が誕生したのは数千万年前の、地上にまだ天山山脈やタクラマカン砂漠が形成されていなかった時代である。中国の甘粛省、四川省を中心として西は中央アジアからヨー

ロッパへ、東は黒竜江を越えて北アメリカにまで分布が広がった<sup>1)</sup>。リンゴ属植物には鳥類の食餌となる小果種から栽培リンゴ種まで様々な種があり、その分類や学名は研究者の見解が異なって未だ確定していないが、一般的には約 40 種に分類されている<sup>1)</sup>。

その中で、加工、生食用リンゴの原生種はヨーロッパから黒海、カスピ海一帯に分布するプミラ種（果径・約 4 cm）と、主にヨーロッパに分布するシルベストリス種（果径・約 2 cm）、および天山山脈とその支脈に分布するシーベルシー種（果径・約 4-6 cm）の 3 種である。

学名はそれぞれ *Malus pumila*、*M. sylvestris* および *M. sieversii* で、*Malus* は‘りんご’、*pumila* は‘小さな’、*sylvestris* は‘森林の’、*sieversii* は人名に由来するラテン語である。

現在の遺伝子解析の結果では栽培リンゴの殆どはシーベルシー種から派生した品種であることが判明している<sup>2)</sup>。栽培リンゴの品種は、例えば‘ふじ’や‘ジョナ・ゴールド’など数百種にも上ると思われるが、学名は品種の相違に係らず、全て *M. pumila* var. *domestica*、あるいは *M. domestica* である。*domestica* は‘順化の’の意味である。

天山山脈周域のシーベルシー種が 18 世紀以降に特にイギリスで改良・育種された栽培リンゴの祖であるということは、この原生種が山脈周域からヨーロッパに持ち込まれた結果であることを示している。

その時代は不明であるが、背景には前 5 世紀のマロンでペルシャ軍の一翼としてギリシャと戦ったスキタイの騎馬戦士、前 4 世紀のアレクサンドロスの遠征軍とそれに続いてシルクロードを交易した隊商、あるいは 4 世紀にヨーロッパに侵入したフン族の軍勢など中央アジアの山麓とヨーロッパを結んだ人々の移動と交流の歴史が積層している。

### 言語の原郷と諸語への分岐

ヨーロッパ諸国とインド周域の様々な言語には共通語彙や用法の規則性、系統性が認められ、それらの言語はインド・ヨーロッパ語（印欧語）と総称されている。言語学や考古学の知見を総合すれば印欧語の原郷は黒海からカスピ海に連なる北方草原であると考えられている<sup>3)</sup>。

紀元前 4000 年頃、銅器や馬、荷車を使用して定住的な牧畜や農耕に従事し、一部は周域に広がる草原で遊牧を営んでいた人々の言葉が印欧語の祖語である。それらの

人々が単民族か、多民族であったかについては不明であるが、前 3000 年頃から一部の人は西のヨーロッパ各地域に移住を始め、その地の先住民と融合してバルトやスラブ、ゲルマン、ケルト、イタリック、ギリシャ語派などの言語を話す人々となった。他の一部もカスピ海を南下して前 2000 年頃にはインドに達し、インド語派の話し手になった（図 1）。



図 1. 印欧語・セム語の原郷と諸言語への分岐

印欧語は、例えば英語では、私は I、私の my、私に me など、格変化によって異なる語彙が用いられるのに対して、日本語では‘私’の語幹に、-は、-の、-に、などの接辞を膠着させて意味を表現する。前者は屈折語、後者は膠着語と呼ばれ、異なる言語の類縁性を考える際の重要な分類区分である<sup>4)</sup>。

### メソポタミア文明とアラビア半島周域の リンゴ呼称 — tph

初期のメソポタミア文明を築いたシュメールの人々はユーフラテス河の下流域に多くの都市国家を建設した。その 1 つであるウルの第一王朝時代（前 2500 年頃）の王妃の墓から輪切りにして紐を通した乾燥リンゴの化石とリンゴの葉を装飾した青銅の冠が出土している<sup>1)5)</sup>。また近隣のファラ遺跡からリンゴ果実を意味するシュメール語、ローマ文字表記では hashur と記述される楔形文字の粘土板（前 2500 年頃）が出土している<sup>1)</sup>。リンゴ果実に関する最古の記録である。

シュメール王朝は前 2000 年頃にセム語系のアッカドに滅ぼされ、続く文明は同じセム語系のバビロニアに引き継がれた。王朝の滅亡に伴い、hashur の語彙もやがて消滅した。シュメールは前 3800 年頃に北方の、おそらくは

黒海周域から移住した人々であると考えられ、その言語は、現在アラビア半島広域で話されているセム語（屈折語）とは異なり、トルコ、アゼルバイジャン、トルクメニスタン、ウズベキスタンなど中央アジアで話される膠着語の仲間である。このことは hashur が黒海周域で生まれた語彙である可能性を示唆するものである。

アラビア半島の草原や河岸湿地で古くから遊牧や農耕をしていた人々、例えばシュメールに続いてメソポタミア文明を担ったアッカドやバビロニア、アッシリア、さらには地中海沿岸地域のカナン、フェニキア、ヘブライなどの人々は上述したセム語に包括される様々な地方言語を用いていた（図1）。ウガリット語もその一つである。

ウガリットは紀元前1800年頃に地中海沿岸で栄えた都市国家である。ここで発掘された粘土板にリンゴの果実を示す語彙と思われる楔形文字、ローマ文字表記では *tph* と書かれる文字が刻まれている<sup>6)</sup>。ウガリット文字は母音を表記しない表音文字で、前1100年頃には国家と共に消滅したので *tph* の正確な発音は不明であるが [ta-pa-ha]、[tu-pu-hu] などと発音されたと推測される。

その痕跡は現在、イラン、イラク、サウジアラビアなどで使われるアラビア語の *tuffāh* (tufā:ha)、ヘブライ語（イスラエル）の *tappūah* (tapuach, tapuakh)、さらにマルタ語（マルタ島）の *tuffieha* などに残されている<sup>7)8)</sup>。エジプトではアラビア語が公用語でリンゴは *tuffāh* である。古代エジプトではリンゴ樹が生育せず、古エジプト語にリンゴの語彙は見られない。同じくリンゴが自生しないエチオピアやソマリア、ケニア北東部で使われているソマリ語に *túfiāh*、ウガンダ、タンザニアなどのスワヒリ語に *toffā* というリンゴの呼称がある<sup>7)8)</sup>。これらの国々と交易したアラブ系商人の物品にリンゴが含まれていた痕跡を残す呼称であろう。

メソポタミア文明が開花し始めたのは前3500年頃である。気候が寒冷化に向かい始め、亜熱帯地域が湿潤で農耕可能な地域に変わり始めたのもその頃であった<sup>9)</sup>。メソポタミア北部のアナトリア高原や南カフカス地方は現在でも原野にリンゴやナシ、サクランボ、アンズなどの野生果樹が分布している地域で<sup>10)</sup>、アッシリアの遺跡から出土した粘土板にもリンゴの他に、マルメロ、ナシ、スモモ、アンズ、サクランボ、メロンなどを表す楔形文字が刻まれている<sup>11)</sup>。

「千夜一夜物語」の第19夜は病気の妻のためにバスラの果樹園でリンゴを買い求めた物語である<sup>12)</sup>。現在のバグダッドやバスラは灼熱の地であるが、アラジンが魔法のランプを灯した時代は温暖で湿潤な気候であったと考えられる。

### 古スラブ語の *ablūko* とスラブ諸国およびカフカス山脈周域のリンゴ呼称

スラブ語はベラルーシからウクライナにかけて農耕生活をしてきたスラブ民族の言語として発祥した。400年から600年頃にかけて民族は様々な地域に移動し、それぞれの地域で地方言語が生まれた。

リンゴ呼称は、ベラルーシ *yablyk*、ウクライナ *yabluko*、ロシア *yabloko*、ポーランド・チェコ・スロバキア *yablko*、セルビア・クロアチア・ボスニア *yabuka*、スロベニア・マケドニア *yabolko*、ブルガリア *yabalka* である。ドイツでは *apfel* であるが、ドイツ東部に住むスラブ系のドイツ人（ソルブ人）は *yabluko* と呼称している<sup>7)8)</sup>。

ロシアの *yabloko* はロシア連邦を構成するいくつかの共和国にも分布している。モンゴル北方のアルタイ、トバでは *yablok*、ハカス *yabloko*、ブリヤートは *yabloka* であり、シベリアのサハは *yabloko*、北方民族エベンキとウイルトのリンゴ呼称も同じ *yabloko* である<sup>13)14)</sup>。

これらの呼称は古スラブ語の *ablūko* に由来するものである<sup>14)</sup>。さらにその源泉は後の項で述べるケルト系民族やゲルマン民族のリンゴ呼称の源とも重なる北ヨーロッパの原始印欧語の *abel* (*abol*, *aval*) であると思われる。これらの語は古代ギリシャ語の *ámpelos* (ブドウ) と関連があるという説もある<sup>16)</sup>。

一方、ハンガリーでは *alma* で、次項で述べるウイグル系の呼称が使われている。ハンガリーの言語はその周辺の国々で話されている印欧語との相関が見られない独立した言語で、*alma* は400年代にこの地に侵入した遊牧民フンが持ち込んだ言葉であると思われる。

印欧語の原郷であり、前500-200年には騎馬民族スキタイが遊弋した黒海とカスピ海の周域には野生リンゴが自生している。特にカフカス（コーカサス）山脈の北と南の山麓には野生のリンゴやアンズが混じった広葉樹林が広がっており<sup>18)</sup>、多様なリンゴ呼称が存在する。それらは山脈北地域のチェチェン語 *'azh*、ダゲスタン語 *'ints*

(`ich, ich)、南地域のグルジア語 vashli、オセチア語(北オセチア、アラニア) faetqui、アルメニア語 khndzor、アゼルバイジャンの北部言語 ech、meyve などである<sup>7)8)</sup>。meyve はトルコ語で果物を意味する語彙でもあり、アゼルバイジャン南部ではウイグル系のリンゴ語彙 alma で呼称されている。カフカス山脈周辺に分布する様々なリンゴ呼称は、同時にその地域の複雑な民族文化構成を示すものでもある(図2)。

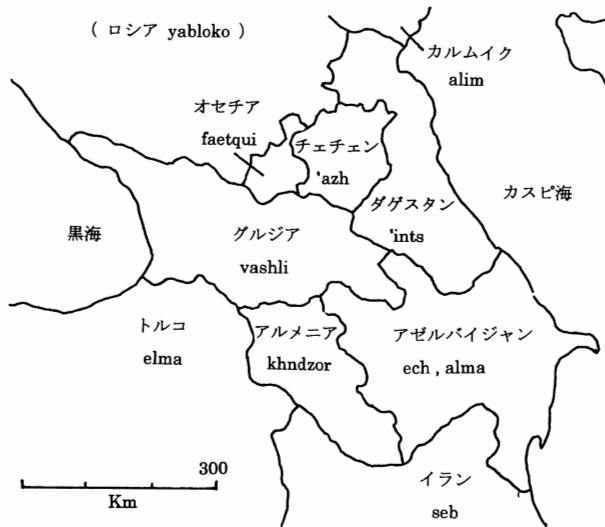


図2. カフカス山脈周辺国のリンゴ呼称

ロシア連邦に含まれる共和国の中にはウイグル系言語の alma を用いている国がある。モスクワの東方、約700kmにある都市カザンを首都とするタタールスタンとその東隣のバシコルトスタンで、住民の多くをウイグル系やモンゴル系遊牧民の末裔が占める国である。タタールスタンの西隣、チュバシ共和国には elma と panulmi のリンゴ呼称がある<sup>7)8)</sup>。

ロシアの農家は母屋の隣に家畜小屋と小さな菜園があり、数本のリンゴ樹が植えられ、周りには家禽の逃亡を防ぐ木柵がある。リンゴ樹は川辺や山麓の林に混生する野生リンゴの中から、甘くて大きく保存可能な種が選択され、移植されたものである。佳良なリンゴは道端で売られ、やがて増収のためにリンゴ園で栽培される。これが栽培リンゴである。

キルギスやカザフスタンで人気が高い栽培リンゴの多くは、1800年代後半にロシア開拓移民がモスクワ南東部のリャザニやヴォロネジ地方から持参して移植したものである<sup>18)</sup>。リャザニ、ヴォロネジ、チュバシ一帯には太古の時代から比較的大果の野生リンゴが自生していたと

思われる。チュバシの panulmi はその頃の名称を継承しているのかも知れない。

### 中央アジアのリンゴ呼称 — alma

新疆ウイグル自治区の最西部を流れるイリ河流域に1200年代のモンゴル王朝、チャガタイ・ハーン国の古址アルマリクがある。ウイグル語のアルマ alma はリンゴ、リクは城で、流域の渓谷や山麓にはリンゴ、アンズ、ナシ、サクランボなどの野生種が混生した広葉自然林が点在しており<sup>19)</sup>、この野果混生自然林は新疆ウイグル自治区をはじめ、カザフスタン南部、キルギス、ウズベキスタンなど、天山山脈とその支脈の山麓に広く分布している<sup>20)</sup>。

草原のチュルク系遊牧民族ウイグルの言語にはイラン系やモンゴル系遊牧民族の言語と共通した語彙が多く、リンゴ呼称はカザフスタン、キルギス、トルクメニスタン、アゼルバイジャンでは alma、トルコは elma、ウズベキスタンは olma (alma) である。モンゴルでは alim、ロシア連邦のカルムイク共和国(図2)は alimn である<sup>7)8)</sup>。

カザフスタンの旧首都アルマトイは文字通り‘リンゴの都’である。南部の郊外はアラトウ山脈に続く山麓で、ここには野生リンゴ(シーベルシー種)が自生している。ロシアの植物学者バビロフは1929年にここを訪れた。それらの野生種が色や形、あるいは大きさなど多種多様な果実を結ぶのを確認してここをリンゴの原生地と考えた<sup>17)</sup>。

特定の形質に多様性が存在する地域、これが果樹や作物の原生地を特定する場合の一つの基準である。シーベルシー種はもっと広範囲に自生しており、種の起原は天山山脈とその支脈一帯で、誕生した時代はこれらの山脈が形成された時代のはるか以前、数千万年前の時代であろうと考えられている<sup>1)</sup>。

### ペルシャのリンゴ呼称 — seb

前1500年頃、黒海・カスピ海北部の草原地帯から南下して、カスピ海南部のイラン高原に居住した遊牧民がペルシャ人の祖である(図1)。彼らは自らをエーリア(アーリア、高貴な人々)と呼び、イラン高原とその周域をエーリア人の土地、エーラーンと呼んだ。国名イランの起源で、ペルシャはギリシャ人がイラン高原を‘騎馬民の地’(パールサ)と呼んだ史実に由来する。ペルシャ人(アーリア人)

は徐々に勢力を拡大し、ザグロス山脈の西方で栄えたバビロニアを併合して、前 550 年にペルシャ王朝を築いた。東方にも進出して前 518 年にはガンダーラを征服しインドに勢力を広げた<sup>21)</sup>。

現在、カフカス山脈南部のグルジア、イラン、アフガニスタン、パキスタンおよびインドで使われているリンゴ呼称はペルシャ語の *seb* (*sib*) である。またトルコ、シリア、イラク、イラン、シリア、カフカス山脈南部のアルメニア、アゼルバイジャンなどに住むクルド民族の *sêv* も同系で、パキスタン北東部パンジャブ州は *sēb*、*siō*、かつてインダス文明が栄えた南東部シンド州では *soofu* である。類似の文化を持つバングラデシュでは *sép* であり、ここにもペルシャ文化の影響が見られる<sup>7) 8)</sup>。

インド南部はリンゴが生育せず、サンスクリット語にリンゴの呼称はない。しかし南部のマハーラーシュトラ州に *safarchand*、タミル州に *aappazham* という呼称があるという<sup>8)</sup>。

### ギリシャとローマのリンゴ呼称 — *milo* と *malum*

ギリシャ語は黒海西部のバルカン半島からエーゲ海を経てキプロス島に至る周域で居住していた人々の言語に発祥する。前 2000 年までに印欧祖語から分かれて独立したと考えられ (図 1)、前 1200 年頃のミケーネ時代の遺跡からフェニキア文字 (線文字) が書かれた粘土板が発掘されている。この文字がギリシャ文字に改良され、口承のギリシャ神話が文字で記録されたのは前 700 年代である<sup>22)</sup>。

ギリシャ神話にはいくつかのリンゴに関する話がある。ヘラクレスが楽園からリンゴを盗んだ話や結婚式場に投げ込まれたリンゴで三人の女神が不和になった話、トロイ戦争の発端もある女神に贈られたリンゴが原因であった<sup>23)</sup>。

ギリシャのリンゴ呼称は *milo* (*melo*) で、もともとはリンゴを含め果実を意味する語彙であった。複数形の *melon* は現在では果実のメロンを表す英語 *melon* になった。前 280 年頃に著されたテオフラストスの「植物誌」には栽培種と野生種リンゴの相違が述べられており、挿し木や接ぎ木の語彙も見られる。その頃のギリシャではリンゴを繁殖し、栽培する技術が確立されていたことがうかがえる<sup>24)</sup>。

前 337 年、マケドニアの王、アレクサンドロスは東方遠征で到達した最東の地に町を建設した。ウズベキスタンのホージェントで、軍と行動を共にした学術隊はこの地の新奇な作物や果樹を収集しマケドニアに移送した。なかでもフェルガナ地方やソグド地方の山麓部に原生するクルミはその後、ヨーロッパやロシアで広く栽培された。同じ山麓に混生しているシーベルシー種の大果リンゴも同じくマケドニアに移送されたと思われる。

テオフラストスはアリストテレスの同僚で、共に若きアレクサンドロスの教育を担っていた博物学者であった。「植物誌」で述べられた栽培リンゴに、天山山脈周域に原生するシーベルシー種が含まれていた可能性は否定できない。

前 600 年代にローマでラテン文字 (ローマ文字) が発明され、ギリシャの技術と文化はラテン文字に翻訳されてローマに流入した。ローマではリンゴは *malum* と呼称された。

ギリシャのリンゴ呼称 *milo* と同様に、ローマの *malum* もリンゴを含めた円形の果実を表す語彙であった。プリニウスの「博物誌」(70 年頃)には杏がアッシリアのマルム、桃がペルシャのマルム、ある種の柑橘類がメデアのマルムと呼ばれたことが述べられている<sup>25)</sup>。

植物の系統分類とラテン語による学名の二名表記を提案したリンネはリンゴをナシの種類と考え、1753 年にリンゴの学名を *Pyrus malus* (ナシ属のリンゴ種) と命名した。しかしリンゴの花粉が黄色であるのに対してナシは紫であり、花柱の基部形状もそれぞれ異なる事実に着目したミラーはリンゴをナシ属から独立させ、リンゴ属 *Malus* として分類した。属名の *Malus* はリンゴ *malum* の形容詞形で、リンネの命名基準に基づいたものである<sup>26)</sup>。

ギリシャの *milo* とローマ (ラテン語) の *malum* は周域のリンゴ名称に影響を与えている。アルバニアの *mollë*、ルーマニアの *măr*、マケドニアの *muza*、モルドバの *umary*、および現在イタリアで使われている *mela* や北西部リグーリア州の方言 *mei*、ナポリの *milo* などである<sup>7) 8)</sup>。

古代ローマ神話の果実と豊穡の女神 *Pomona* は果実 *pomum* と関連する名称である。これらの名称を源とするリンゴ呼称がイタリアの地方言語に残されている、北東部のエミリア州の *pàm*、ベネチアの *pomoro*、南部のシチリア島の *pumu* などである。

ラテン語を公用語にしたフランク王国では *pomme* と

呼称され、そのままフランス語に継承されている。北フランス・ワロン地方の *pemi*、*peme*、ノルマンジー地方の *poume*、南フランスとそれに隣接するスペイン・カタルーニャ地方の *poma* も同じ起原であり、国際共通語として創られたエスペラント語では *pomo* である<sup>7)8)</sup>。

### ケルト系民族とゲルマン民族のリング呼称 — *aval* と *apluz* —

スカンジナビア半島のフィンランドとバルト海を南に渡った対岸のエストニアの言語は類似しているが周囲の言語とは関連が見られない孤立した言語である。それぞれの国のリング呼称は *omena* および *õun* で、エストニア南東部の方言に *upin* がある。古代にこの地に居住したフィン人の言語に由来するリング呼称と思われる。エストニアを除くバルト三国のラトビアとリトアニアの呼称はそれぞれ *ābols*、*obuolys* である<sup>7)8)</sup>。

先史時代のスイスの杭上集落遺跡から2種類の炭化リングが出土している<sup>27)</sup>。径は2 cm と 3.5 cm で野生のシルベストリス種とプミラ種と思われ、冬期の食糧として乾燥貯蔵されたものであろう。東の草原からヨーロッパ人の祖先が移住してくる前の時代から自生のリングが利用されていたと考えられる。

ヨーロッパの先住民といわれるケルト系民族は単一民族ではなく、ケルト語を話す諸部族の総称である。前2500年頃、中央アジアの草原から馬と車輪付きの馬車や戦車でオーストリア中央部に移住した原始ケルト系諸部族は、湖の岸に杭上集落を築き、前1200-500年の青銅器時代から鉄器時代にかけて独自の文化を醸成した<sup>21)</sup>。

前400年頃にはケルト系民族の居住域はローマとギリシャを除くほぼヨーロッパ全域に拡大した。やがてローマ勢力への同化と、紀元400年代に始まったゲルマン諸民族の南下に伴い、それらの民族に吸収されていく。

ケルト語のリングは *aval* (*abal*, *abol*) である。ケルト伝説の英雄、アーサー王がゲルマンとの戦いで負傷し、最期を遂げた地はアバロン(*avallon*、リングの島)であった。

イギリスと周囲の諸島、フランスの一部にケルト語由来のリング呼称が残されている。アイルランドの *úll* (古アイルランド *ubull*)、マン島の *ooyl*、スコットランドの *ubhal*、ウエールズの *afal* [*aval*]、コーンウォールとフランス・ブルターニュ地方の *aval* である<sup>7)15)28)</sup>。

ドイツ北部とユトランド半島に原住したゲルマン諸族は400年頃から南に移動を始めた。アングル・サクソン族はイギリスを居住地とし、フランク族はやがてフランスからドイツ、ベルギーに至る広域にフランク王国を築いた。

ゲルマン民族が興した国々には類似のリング呼称が見られる。デンマークの *æble*、ドイツの *apfel* とケルン方言の *appel*、オランダの *appel*、イギリスの *apple*、スコットランド英語の *aiapple*、ルクセンブルクの *apel* などで、スカンジナビア半島のスウェーデンは *äpple*、ノルウエーは *eple*、アイスランドは *epli* である<sup>7)5)28)</sup>。これらの呼称の由来は古代ゲルマン語の *apluz* (*aplaz*) で、古代ギリシャ語の *ámpelos* (ブドウ) と関連があると思われる<sup>16)</sup>。源泉はケルト語の *aval* と同じく、原始印欧語の *abel* であろう<sup>15)</sup>。

イベリア半島はゲルマン民族のヴァンダル族が移住した地であるがゲルマン系のリング呼称はなく、スペインは *manzana*、北部のガリシア州は *maceira*、アストリアス州は *mazana*、ピレネー山脈に近いアラゴン州も *mazana* で、ポルトガルでは *maça* である<sup>7)8)</sup>。これらの呼称は前200年代から始まったローマの支配で、民衆が用いた俗ラテン語のリング呼称 *mattiana* に由来する。これはローマの果樹栽培家マテウスが育成したマテウスのリング、*'mala mattiana'* に発祥するものであるという<sup>29)</sup>。かつてスペインが植民地にしてリングを移植した国々にもスペインの呼称が残っている。中南米やペルーの *manzana*、フィリピンの *mansanas* などである<sup>7)</sup>。

イベリア半島北東部のバスク地方はヨーロッパの言語とは類縁がない独立した言語をもつ地方で、そのリング呼称は *sagara* である<sup>7)</sup>。

### 中国、朝鮮、日本のリング呼称 — 林檎

‘林檎’は中国で生れた語彙である。後漢時代(25-220年)に著述された「西京雜記」に、長安郊外の宮廷園で植栽された果樹の記録に林檎の語彙が見られる。林檎 *lin-qin* は林禽、来禽とも記述され、林にその果実を求めて小鳥(禽)が来る情景に発祥する語彙である。径4 cm程度の果実を着生し、*M. asiatica* の学名が与えられている中国北部の原生種である<sup>30)</sup>。

この呼称は次第に沙果 *sha-guo*、花紅 *hua-hong* に変わり、林檎の語彙は清時代までに消失した。朝鮮には林檎 *rim-*

gum の語彙は残っているが、栽培リンゴは沙果 sa-gwa と呼称されている<sup>31)</sup>。

林檎が日本に渡来したのは平安時代で、その後小規模な植栽が各地方に広がった。東北地方にはリンキンと呼ばれる林檎の変種があった。‘リンゴ’が林檎の呉音 *lingon* に由来する名称であるのに対して、‘リンキン’は林檎の漢音 *lin-qin* 由来の呼称であろう。現在、これらの種は‘和林檎’と呼称されて一部の地域で保存活動が続けられている。

前述した「西京雜記」にもう一つのリンゴ種、柰 *nai* が記載されている。柰は西域から中国に渡来した大果リンゴの呼称で、天山山脈周域の原生種、*M. sieversii* やカスピ海北部に生育する様々な野生種の総称であったと思われる。

その中で赤色系のリンゴは、仏教経典で仏の化身を意味するサンスクリット語の *bimba* と仏教では穢れのない清らかな色である赤のイメージが重なり、唐から宋の時代にかけて類婆 *pin-po* と呼称されるようになった<sup>30)</sup>。類婆は意味を持たない表音語彙で苹婆 *ping-po*、類果 *pin-guo* などとも表記されたが、明時代後期に苹果 *ping-guo* に変わった。現在、中国でリンゴを表す語彙は苹果 *ping-guo* である。

明治時代初期、政府の殖産政策で数十品種の西洋リンゴ苗木が輸入され、繁殖された。これらの果実はそれまでの林檎（和林檎）と区別するために苹果 *hei-ka* と呼称された<sup>30) 32)</sup>。しかしこの名称は一般社会に浸透せず、昭和時代の中頃には林檎が西洋リンゴを意味する語彙に変わった<sup>30)</sup>。

アイヌ民族のリンゴ呼称はセタンニ *setanni* (*setar* 果実 - *ni* 木)、あるいはセタニである<sup>33)</sup>。しかしこの呼称は北海道に自生する果径 0.8 cm 程度のエゾノコリンゴや 2 cm 程度のイヌリンゴの呼称で、本稿で考察する栽培リンゴは自生せず、これに相当するアイヌ語はない。一部のアイヌ語辞典にセタニを、*seta* 犬 - *ni* 木、とした記述が見られる。セタニはセタンニの慣用短縮語で、犬の木を意味する語彙ではないと考えられる。

### 北アメリカ先住民族のリンゴ呼称

北アメリカの原生種は全て小果リンゴで、現在、特に東部地域で栽培されているリンゴは 1600 年代に入植した

ヨーロッパ移民によって持ち込まれたものである<sup>34)</sup>。小果リンゴは主に花や樹形を觀賞する園芸樹として利用されているが、ヨーロッパの先住民が小果リンゴを乾燥保存食としたのと同じく、北アメリカの先住民も同様の利用を考えたと思われる。

小果リンゴの呼称は様々な部族に残っている。カナダやアメリカ北部に居住するアルゴンキアン系部族の *waabimin*、五大湖西部のシャイアン族の *m'axeme*、コロラド高原周域のナバホ族の *belasana* (*bilasaana*)、アパラチア山脈南西部のチカソー族の *takolo*、*masofä*、南東部のチェロキー族の *sv(ga)ta*、*səgata* などである<sup>7) 8)</sup>。

様々な部族にそれぞれ異なる語彙が分布している事実は、4-3 万年前の氷河期にユーラシア大陸から何波にも渡ってベーリング海峡を越えて来たそれぞれの祖族が独自の言語文化を醸成させ、その文化圏にリンゴが自生していたことを裏付けるものである。

さらにそれらの部族、すなわちアメリカ・インディアンの言語はベーリング海峡を挟んだ北方圏の民族イヌイトやエスキモー、南米のマヤ民族、我国のアイヌ民族と類似した言語分類の抱合語に含まれる。このことは、これらの民族が共通の言語文化を持った遠い祖族から分岐した可能性を想起させる。抱合語は例えばアイヌ語の、*homari* - 彼が住む、*arpa* - 彼が行く、のように一つの語彙が一つの文のように機能する言語である。

### おわりに

ここまで世界の国々や民族のリンゴ呼称について概説してきた。しかし民族と文化のつぼと言われるカフカス山脈周辺には約 40 種の言語が分布し、北アメリカの先住民には 100 種を超える様々な言語が存在している<sup>35)</sup>。これらの地域のリンゴ呼称の収集については充分とは言えず、いささか点睛を欠いた感がある。折を見て別稿を著したい。

### 謝辞

ウイльтаやエベンキなどの北方諸民族のリンゴ語彙は北海道立北方民族博物館、笹倉いるみ学芸主幹の御教示に依るものである。稿を終えるにあたり笹倉主幹に深く感謝の意を表す。



## 要約

最古のリンゴ語彙は古代メソポタミアの粘土板に印された楔形文字、シュメールの hashur およびウガリットの tph である。tph はヘブライ語の tappûah やアラビア語の tuffâh などのリンゴ呼称になった。ペルシャの呼称 sev (siv) はペルシャ帝国の拡大に伴って支配地域に拡散し、クルド民族の sêv、パキスタンの sêb (soofu)、バングラデシュの sêp などに影響を残している。

ヨーロッパ先住のケルト民族の呼称 aval (abal) は今もその文化が残るスコットランド ubhal、ウエールズ afal、コーンウォール aval などに残されており、古代ゲルマン民族の apluz (aplaz) はこの民族の血統を引くオランダ appel、ドイツ apfel、イギリス apple や北欧諸国のノルウェー eple などの呼称に痕跡を残している。これらの全ては原印欧語のリンゴ呼称 abel に由来するものと思われる。

古代ギリシャのリンゴ呼称は milo (melo) であった。その影響下にあった古代ローマでは malum と呼称された。この語彙はリンゴ属を表す学名、*Malus* になっている。豊穡と果実の女神、ポモナはフランスの pomme、スペイン・カタローニヤ地方の poma、エスペラント語の pomo などの起原である。古代ローマのリンゴ品種、マテアーナはスペインの manzana、ポルトガルの maçã などの呼称を生んだ。

古代スラブ語のリンゴ呼称は ablüko である。それはロシア yabloko、ベラルーシ yablyk、ポーランド yablko などスラブ民族文化が浸透している国々から、かつてロシア連邦を構成したアルタイ yablok、ブリヤート yabloka、サハ yabloko などの共和国にも広がっている。

天山山脈北方の遊牧民族ウイグルのリンゴ呼称は alma である。この呼称は新疆ウイグル自治区、カザフスタン、キルギスなどに、また類似呼称はトルコ elma、ウズベキスタン olma、モンゴル alim などに分布している。

林檎は漢時代の中国で‘林に小鳥(禽)を集める果実’に因んで生まれた語彙であるが、やがて日本のリンゴ呼称になった。中国では苹果 ping-guo、朝鮮では沙果 sa-gwa と呼称されている。

## 引用文献

1. B. Juniper・D. Mabberley : The Story of the Apple、Timber Press、Portland (2006)
2. R. Velusso・et al. : Nature Genetics、Vol. 42 (10)、833-839 (2010)

3. R. キング編：人類の起源と移住の歴史、柘風舎、東京 (2008)
4. J. リチャーズ編：ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典、南雲堂、東京 (1988)
5. Puabi's Diadem and Headdress、<http://www.penn.museum/sites/iraq/>
6. W. Watson : A Botanical Snapshot of Ugarit. Trees, fruit, plants and herbs in the Cuneiform texts、Auta Orientalis、Vol.22、107-155 (2004)
7. Apple Word、<http://www.perceppwo.com/apple.htm>
8. Apple, Languages、<http://en.wikipedia.org>
9. 安田喜憲：気候変動の文明史、NTT 出版、東京 (2004)
10. 薬師寺博・他：トルコ共和国における核果類およびリンゴ遺伝子資源の共同調査収集、農業生物資源研究所・植探報、Vol. 20、103-123 (2004)
11. G. Rawlinson : Seven Great Monarchies of the Ancient Eastern World、Vols. 1 and 2、John B. Alden Pub.、New York (1840)
12. 前嶋信次訳：アラビアンナイト 2、平凡社、東京 (1966)
13. B. Boldirev : Russian-Evenki Dictionary、'Nauka' Publishing、Novosibirsk (1994) in Russian
14. L. Ozolinya・et al. : Orok-Russian Dictionary、Sakhalinsk Literary Publishing、Yuzhno-Sakhalinsk (2003) in Russian
15. 寺澤芳雄編：英語語源辞典、研究社、東京 (1999)
16. Apple、<http://en.wiktionary.org/wiki/apple>
17. N. ヴァヴィロフ・中村英司訳：栽培植物発祥地の研究、八坂書房、東京 (1980)
18. Two British Apple Growers in the Tian Shan、<http://steppemagazine.com/articles/sweet-pilgrimage>
19. 林培鈞・崔乃然編：天山野果林資源、中国林業出版社、北京 (2000)
20. J. Janick ed. : Horticultural Reviews、Vol. 29、John Wiley & Sons、New Jersey (2003)
21. 樺山紘一他編：クロニク世界全史、講談社、東京 (1994)
22. 音素文字の歴史、<http://ja.wikipedia.org/wiki>
23. 山下主一郎訳：神話・伝承事典、大修館書店、東京 (1988)
24. 大槻真一郎・月川和雄訳：テオフラストス植物誌、八坂書房、東京 (1988)
25. 大槻真一郎編：プリニウス博物誌・植物篇、八坂書房、東京 (1994)
26. D. Mabberley・et al. : The name of the apple、Telepea、Vol.9(2)、421-430 (2001)

27. ド. カンドル著・加茂儀一訳：栽培植物の起源（中）、岩波書店、東京（1958）
28. Oxford English Dictionary 2nd ed., CD-Rom Ver.4.0、Oxford University Press、New York（2009）
29. Etymology of apple and coffee、<http://linguacuriosa.blogspot.jp/2009/09/etymology-of-apple-and-coffe.htm>
30. 境博成・王鵬：林檎・柰・蘋婆・苹果－中国と日本におけるリンゴ果実の呼称の変遷、ESD・環境教育研究、Vol. 13（1）、25-33（2011）
31. 油谷幸利他編：朝鮮語辞典、小学館、東京（1993）
32. 村瀬五郎：Apple－その「実」と「名称」をめぐって、国際社会文化研究、Vol. 7, 105-128（2006）
33. 知里真志保：分類アイヌ語辞典・植物編 動物編、知里真志保著作集 別巻1、平凡社、東京（1976）
34. E. Kronaure・et al.：A Collection of Apple Pie Recipes and the History of Apple Growing in America、Flagship Press、Harvard（2002）
35. R. アシャー編：世界民族言語地図、東洋書林、東京（2000）